

## 神々の里 出雲の旅(1)

4/12/2015

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

寝台列車「サンライズ出雲」に乗って一路出雲の国に出発しました。寝台列車は43年前に大学受験で利用して以来です。その時は、受験の緊張というより、線路のつなぎ音と3段のベッドの狭さで、あまりよい印象はありませんでした。しかし、今回は当時とはまったく異なり、個室が主流になり、縁結びパワースポットの土地に向けてとあって若い女性の姿が多く見受けられました。横浜駅を22時24分に出発し、約12時間の列車の旅が始まりました。夢か、列車の揺れの影響でか熟睡とはいきませんでした。ベッド上で飲んだアルコールのおかげで岡山駅(朝6時前)の手前で朝の目覚めとなりました。岡山駅からは、中国山地を縦断する伯備線のため勾配があり一気に速度は低下しましたが、山のいたるところに桜や桃の花を見られたことが新幹線にはない旅の良さでした。

翌朝10時頃には神々の里「出雲市駅」に到着。昨年60年ぶりの大遷宮が行われたとあって、街には外国人の姿もよく見受けました。

出雲大社では、ガイドさんの説明を聞きながら、歴史の流れや作法などを教わりましたが、「大国主大神」の住まうところとあって実に壮大で威厳ある建築であることに驚かされました。また、最大のしめ縄があるところは、「神楽殿」と「拝殿(写真右)」であるにも関わらず、あまりにも立派なしめ縄に、「御本殿」と間違える参拝客も多いという話でした。



また、地元のタクシーの運転手さんから聞いて知ったのですが、実は出雲大社は「縁結び」と言われていますが、本当は「ご縁」の社であり、男女の縁、人、物、出来事などのすべての縁を結ぶと言われているようです。実際に男女の縁結びは、同じ出雲にある「八重垣神社」にあるということです。ここには、根が2本あり、地上で1本になっている立派な「夫婦椿」がありました。まさに仲のよい夫婦の象徴のようなものがありました。

「神魂神社(写真右)」にも足を運びました。参拝客は我々を含めて2組と大変寂しい地でしたが、何と、この神社は、出雲国造家の祖先神(本家)と言われ、現在でも国造家の宮司は毎年参拝に来るとのことでした。これが伝統というものでしょうか。社の数は出雲の国で399あるとのことでした。まさに出雲は神々の里なのです。



←ダイコク様  
小さいけど  
↓エビス様

ガイドブックにはない話で、やはり案内していただいたタクシーの運転手の方から聞いた話です。「家の屋根瓦を見てください」というのです。よく見ると、どの家にも鬼瓦の部分に大黒様とえびす様のお顔がついているではありませんか。もちろん大黒様は「出雲大社」の大国主大神であり、えびす様は大黒様



の子どもである事代主神で、「美保神社」に祀られているのです。(全国のえびす様の総本宮)。地元では、両方の神様に家を守っていただいているとのことでした。但し、最近の近代的な家にはありませんでしたが……

次に松江市内散策したことをお話ししましょう。

松江市内は、山を切り開いたり、その土で埋め立てたりしてできた街で、1607年から5年をかけて堀尾吉晴公が築城と街を興しました。水運の利便性を図るために運河を掘ったり、敵の侵入を食い止めるために、街の十字路を変形にしたりして都市設計をしたとのこと、その名残が街のいたるところに現在も残っていました。そのようなことで、松江は、「水の都」とも呼ばれています。

また松江は、京都、金沢と並ぶ菓子処であり、茶の湯の文化が市民の中にも深く根付いているということです。茶人として名高かった藩主の松平治郷に献上しようと菓子職人が競って技を磨き数々の銘菓が生まれたとのこと。我々も「若草」という和菓子を食べましたが、緑の粉がまぶしてあるふっくらとした味わいのあるものでした。下の写真右にあるのは、2年がかりで夜なべ仕事で、職人が作った和菓子工芸です。あまりにも美しいので撮影してきました。状態を維持するためにガラス箱に入れて展示してありました。この方は現在でも歴史館の中にある工房で、和菓子の創作に励んでおられました。

出雲の国は、人も風景ものどかで優雅でした。やはり神々の国であるからでしょう。



「松江城」全国に現存する12か所の天守閣のひとつ



これは、立派な「和菓子工芸」です